



ひとりじゃない



不運の連鎖

春日信彦

## 不幸の連鎖

甲子園出場の常連校として全国的に有名な大分のY高校に進学した菊池だったが、7月に入り、ボールを投げると肩に軽い痛みが走るようになった。寮の近くのT病院で精密検査をしてもらったところ、野球肩と診断された。菊池は、突然の障害に落胆し、もはや投げられないのではないかと不安にかられた。医者から、休養を取り、様子を見るように言われ、一週間ほど肩を休めた。恐る恐る、練習を再開してみたところ、10球も投げないうちにビリビリと電気が走ったような痛を感じた。

再診したところ、医者の診断では、手術するほどの炎症ではないということで、一ヶ月ほど休養するようにと練習を止められた。8月中旬を過ぎ、神に祈る気持ちで、軽くピッチングの練習を再開した。初日は、十分柔軟体操とストレッチを行ったためか、何の痛みも無く50球を投げ込むことができた。翌日も、まだ無理をせず、軽いピッチングを行ったが、20球を投げ終えたころから、電気が走るような小さな痛みが走り始めた。

菊池は、恐怖のあまり、突然、左腕が動かなくなってしまった。菊池は、再度病院で精密検査を受けたが、医者は、腕組みをして考え込んだ。炎症はきれいに消えて、インナーマッスルは回復している。いったい、どこから来る痛みなのか？医者は、うなりながら菊池に答えた。「問題は無い。どの程度の痛みでしたか？」医者は、菊池に具体的な痛みについて訊ねた。

菊池は、痛みの表現に困ったが、感じたままを話した。「あの時は、電気が走ったような、ビリ、ビリ、って感じの痛みでいた。だから、怖くなってすぐに、ピッチングをやめました」膝に置いた菊池のこぶしが震えていた。医者は、首をひねり答えた。「検査では、特に筋肉にも関節にも問題は無い。もうしばらく、軽いピッチングをやってみて、それでも、痛みが走るようであれば、再診に来てください」医者は、骨肉腫を疑っていたが、そのことは伝えなかった。

9月に入り、菊池は、日曜日なのに、寮の相談室に監督から呼ばれた。監督は、菊池の原因不明の痛みのことを気遣い、バッターへの転向を提案した。「菊池、肩の調子はどうだ。まだ、痛むのか？今日呼んだのは、今後のことだ。先生も残念だが、投手は無理だ。投手をあきらめ、バッターの道を歩んでみてはどうだろう？お前の選手生命を考えれば、これが一番いいと思うが」監督は、断腸の思いで、今後の方針を伝えた。

菊池の肩から、痛みは消えなかった。だが、監督には痛みのことを伝えていなかった。痛みをこらえながら投げる菊池を見ていた監督は、菊池のピッチングは、もはや、使い物にならないと判断していた。菊池も投手としての自分に自信をなくしていた。菊池は涙をこらえて、しばらく黙っていたが、小さな声で答えた。「分かりました。返事は、一週間後でいいですか？」監督は、頷き、部屋を出て行った。

翌日、部活を休み、9月2日に受けたMRI検査の結果を聞くために勇気を出して病院に行った。菊池は、覚悟していた。この痛みの原因が、選手生命を絶つものであれば、退学するつもりでいた。診察室に呼ばれた菊池は、じっと宣告を待った。「菊池君、痛みはどうか？時々、痛みますか？前回のMRIの結果ですが、ちょっと気になることができました。できれば、もう一度、検査したいと思います。その結果を、菊池君だけではなく、ご両親の方にもお話したいのですが、ご都合はつきますか？」医者は、骨肉腫であることを、本人だけに話すことは、避けることにした。

菊池は、このとき、電気が走るような肩の痛みは、致命的な病気であることを直感した。「はい、その検査は、福岡ですることができますか？」菊池は、すでに心の中では、退学し、糸島に帰る決意をしていた。「はい、Q大病院を紹介します。できるだけ早く、受診してください」菊池は、目の前が真っ暗になり、立ち上がることもできなくなっていた。「菊池君、元気を出さない、病気は必ず治る。少しの辛抱です。必ず、投げられるようになるから、さあ、元気を出して」医者は、菊池の治療を神に祈っていた。

菊池はその夜、肩の病気と退学のことを父親、太に話すことにした。父親は、いつも帰宅が遅かったため、9時過ぎに電話することにした。電話をすると、すぐに受話器がとられた。弟の浩二の元気な声が耳に飛び込んできた。「はい、菊池です」勇樹は、ほんの少し間を置いて、返事した。「兄ちゃんだ。オヤジ、帰ってるか？」勇樹は、弟のことを気遣うことも無く、父親を呼び出した。「お～、に一ちゃん。と一ちゃん、飯くっとう」浩二は、受話器を置くと、父親に声をかけた。「勇樹、に一ちゃん」浩二は、受話器を太の方に差し出した。

太は、受話器を取ると、緊張した声で話した。「今頃、どうした？」太は、不吉な予感がしていた。勇樹は、ほんの少し間を置いて、一気に話し始めた。「俺、肩の病気になった。それで、精密検査をQ大病院ですることになった。結果ば、俺と両親に報告したいらしい。それと、肩がいつて、もう野球、できんくなった。学校、辞めても言いやろか？」勇樹は、涙をこらえて話し終えた。太の手は震えていた。最も恐れていたことが、現実になり、腰が抜けそうになった。

「勇樹、落ち着け」受話器を置くと、太は、キッチンの椅子を取りにいき、ドスンと腰をかいた。受話器を取った太は、大きく深呼吸をして、話し始めた。「そんなに痛むのか？ボールが、投げれんほど、痛むのか？」太は、単なる野球肩ではないかもしれないと直感した。「うん、投げれんほど、痛い。監督は、バッターに転向したらいいと言ってくれたけど、バットを振っても痛い。もう、野球はできん。早く、治療せんと、もっと、いとうなるかもしれん」肩の痛みは、ますますひどくなっていた。

太の顔は真っ青になっていた。太は、骨肉腫ではないかと直感した。単なる野球肩だったら、Q大病院で精密検査をすることはない、と思ったからだ。「分かった、明日にでも、学校に行く。肩の検査のことを監督に話して、今後のことを相談する。心配するな。とにかく、治療が先決だ。早く寝て、何も考えるな、いいな」太は、電話を切ると、明日の予定を浩二に話した。

太は、翌朝4時に、スカイラインで九州自動車道を大分市までぶっ飛ばした。7時前に寮に到着すると、管理人に挨拶し、勇樹を呼び出してもらうことにした。勇樹は、5時には目を覚まし、座禅を組んでいた。管理人と一緒にやって来た勇樹は、父親を見て驚いたが、ほっとした気持で父親に駆け寄った。込み入った話があると思った管理人は、相談室に二人を案内した。

太は、勇樹の気持を思って、病気に関することは話さないことにした。「勇樹の気持はよう分かったばい。とにかく、治療が先決たい。9月末で退学して、治療に専念すりゃあいいたい。先生には、父ちゃんが、ちゃんと話をしちやる。心配せんでいい。さっそく、担任の先生にこのことを話して、監督にも話すばい」野球の特待生で入学した勇樹にとって、野球ができなくなった今、退学することが最善だと太は思った。

太と勇樹は、その日の放課後に、担任の先生と監督に肩の病気と退学のことを話した。勇樹は、9月末で退学することになり、Q大病院での診察のこともあり、さっそく寮を出ることにした。9月15日に帰宅した勇樹は、病状が悪化しないうちにと、一刻も早く病院に行くことにした。9月18日に紹介状を持ってQ大病院に行ったところ、9月20日に精密検査を受けることになった。

9月27日、Q大病院での精密検査の結果、骨肉種と診断された。しかも、すでに、肺に転移していた。勇樹がこれ以上絶望しないように、医者は、転移のことは父親のみに伝え、本人には隠しておくことにした。骨肉種は初期のもので命には別状無く、化学治療と患肢温存手術で約半年間の入院及び通院で完治する、と勇樹には伝えられた。太は、予感していたとはいえ、子供の不幸は、自分の不幸の何十倍もの心の痛みとなった。勇樹は、野球人生が終わったことに絶望し、将来のことを考えることもいやになってしまった。

骨肉腫と診断され、落ち込んだ勇樹を励まそうと心では思っていたが、太にどうしようもない悲しみが襲いかかっていた。というのは、太には、糸島高校野球部監督をしている親友の中村にも話をしていないことがあった。それは、かつて、実業団のノンプロでプレイしていたときに、野球肩になり、投手生命が絶たれたことであった。太の不運に続き、勇樹の不運を考えると、なぜ、親子に非情な不運が襲いかかるのだらうと、悲しくて、悔しくてならなかった。

### ひとりぼっち

勇樹は、10月5日にQ大病院に入院することになったが、それまで、毎日が不安であった。病状は初期のもので、必ず完治すると、担当医に慰められていたが、それでも、骨肉腫から肺にガンが転移して死亡することもあると、ネットで調べて知っていた。勇樹は、退学して自宅に戻っていることを誰にも話したくなかった。そのことを知られたならば、必ず理由を聞かれると思ったからだ。

毎日、部屋にこもっていたが、入院してしまえば、しばらくは羽を伸ばせなくなると思い、入院の前日金曜日の昼間に外出することにした。ウィークデイであれば旧友たちは高校に行って、彼らに出くわさないと思い、12時過ぎにマックに出かけていった。中学時代によく座った窓際の席で、のんびりとチーズバーガーをかじっていると、後ろから肩をポンと軽く者がいた。

振り向くと、化粧をした八神だった。勇樹は、一瞬まずいと思ったが、もはや、手遅れであった。八神は、父親が経営している八神焼肉飯店を手伝うために、糸島高校定時制に通っていた。このことを、勇樹はすっかり忘れていた。八神は、時々、お昼に友達とマックで落ち合っていた。「よ、菊池、久しぶり。こんなところで何やってんのさ？」八神は、名門Y高校で野球をやっているはずの菊池が、糸島のマックにいることに目をむいて驚いた。

勇樹は、即座に逃げようかと思ったが、それではますます怪しまれると思い、どうにか、その場をつくらせてごまかすことにした。「あ、ちょっと親父のことで、今朝、帰ってきたんだ。明後日には、寮に戻るけどね」勇樹は、とにかく八神を追っ払いたかった。「お父さん、具合でも悪いの？」八神は、てっきりお父さんが病気したと思った。「ま、たいしたことはないんだけど、今日の夕方から、胃の検査入院をするんだ。親父は、大げさで、胃ガンかもしれん、なんていうもんだから、心配で飛んで帰ってきたってわけさ。人騒がせな、オヤジだぜ」勇樹は、作り笑いをしてごまかした。



八神は、頷きながら、勇樹の前にトレイを置き座り込んだ。「え、それは大変なことよ。胃ガンをあまく見たら、大変よ。うちの親父も胃ガンになって、半分取ったんだから。胃ガンは、手術すれば完治するみたいだから、そんなに心配ないけど、発見が遅れると、ガンがすい臓に転移して、死亡する場合もあるらしいの。ガンじゃなければいいけどね」八神は、胃ガンの手術をした父親のことを例にして、ガンの怖さを話した。

勇樹は、話が大きくなってしまったことに困惑したが、後に惹かれなくなってしまった。「いや、親父の取り越し苦労さ、きっと、軽い胃潰瘍と思うけどね。親父には、笑っちゃうよ。そう、八神は、定時制だったな。誰かと待ち合わせでもしているのか？」勇樹は、話を変えようと八神の様子を聞いた。八神は、待ち合わせをしていたが、つい先程キャンセルのメールが入り、帰ろうとしていたところだった。

「そうなんだけど、今日は、こられない、ってメールが入ったのよ。だから、帰るところだったの。まさか、菊池が話し相手に代わるとはね。ちょっと、ラッキーって感じ」八神は、仕事のウサをはらすために、時々、マックで友達に愚痴をこぼしていた。勇樹は、八神に捕まると大変なことになると、逸早く逃げることにした。「残念だったな、俺、帰らないと」勇樹は腕時計をチラッと見て、席を立とうとした。

八神は、目を大きくして、声をかけた。「何よ、逃げなくてもいいじゃない。まだ、12時半よ、入院は、夕方でしょ。まだ、話したいことがあるんだから。いろいろと」八神は、席を立とうとした勇樹を強い口調で制した。「ま、そうだな。急ぐことはないよな。ちょっと、時間つぶしでもするか」勇樹は、かなりまずい展開になったと思ったが、ここで逃げ出すと、裏口を叩かれそうで、とにかく、八神の機嫌をとることにした。

勇樹は、八神をまじまじと眺めて、笑顔でお世辞を言った。「八神、一段と可愛くなったな。化粧してたから、最初見たとき、誰かと思ったよ。高校でもアイドルだろーな」勇樹は、入院の話のを忘れさせようと、思いっきり、お世辞を言った。「え、そう、化粧には自信があるのよ。化粧って、結構、ムズイのよ。男性には分からないと思うけど。クラスでは、アイドルなんだけどね、肝心の歌手への道は程遠いって感じ。ヤッパ、歌手には向いてないのかな〜」八神は、歌手になるべく、週に二度、天神まで歌のレッスンに通っている。

勇樹は、歌手の話に持っていけば、話がそれると思い、オーディションの話を持ち出した。「八神は、アイドル顔だし、声もいいし、絶対歌手になれるよ。オーディションを受ければいいじゃないか。俺が太鼓判押すよ」八神の目の輝きを見て、しめたと思った。「それが、レッスンの先生が、今の實力では、通用しないって言うの。あ〜あ、へこんじゃった」八神は、ルックスでは、イケルと思っていたが、歌唱力がいまひとつであった。

「そうだ、HKT48のオーディションを受けてみてはどうだ。16歳だし、まだ、イケルと思うけどな〜？」勇樹は、人気のHKT48を持ち出した。「だめよ、平均14歳なのよ。無理、無理。とにかく、今はレッスンを頑張る、まあ、運がめぐってきたら、歌手になれるかも」八神は、たとえ歌手になれなくとも、歌のレッスンは続けたかった。勇樹は、大きく頷き、激励した。「八神は、えらい。きっと、歌手になれる。俺は、ずっと、八神を応援するし。ガンバ、八神」勇樹は、腕時計を見て、すっと立ち上がった。

「え、もう帰っちゃうの。これからじゃない。せっかく、話が弾んできたっていうのに。何か、急用でもあるの？」八神は、中学のころから、話し始めると止まらないタイプだった。いったん立ち上がった勇樹であったが、顔をしかめて、腰を下ろした。「いや、早めに帰って、準備をしようかと思ってさ」八神の話好きにムカついたが、そうかといって、むげに立ち去るのも変なようで、結局、話につき合うことにした。

勇樹が腰を下ろすやいなや、息を吹き返したように話し始めた。「勇樹、もう、エースになったの？来年は、甲子園、出られそう？マウンドに立った菊池は、かっこいいだろうな〜。マジ、応援するし。何か、学校のこと、話してよ。Y高校ってどんなところ？」八神は、菊池が甲子園に行くと思い込んでいた。勇樹は、話がやばくなったと内心思った。このまま話が学校の話に流れれば、退学したことを話さなければならなくなると不安になった。

「やはり、名門校だけあって、俺よりすごいやつばかりだよ。俺なんか、万年補欠かな」逸早く、野球の話をやめるために、自分を卑下した話をした。「え、そんなにすごい、ところなの。菊池が補欠だなんて、信じられない。現実って、厳しいのね。でも、勇樹には、根性と夢があるし。きっと、将来は、プロになれるよ」八神は、自分を励ましてくれたお返しに、勇樹を元気付けた。

勇樹は、うつむいていたが、小さな笑顔で、感謝の言葉を言った。「ありがとう。でも、現実には、やっぱ、厳しいよ。自信なくしたし」勇樹は、病気のことを思い出し、つい、弱気な発言をしてしまった。八神は、何か、いつもの勇樹でないような気がした。「勇樹、どうしたの。いつもの威勢はどこに行ったのよ。勇樹らしくないな～。死んだ魚のような目をしてるし。悩みがあったら、話しなよ。ゆう子に代わって聞いてやるからさ」八神は、あまりの異変に、勇樹の身辺にきっと何かがあったと直感した。八神は、中学時代の彼女だったゆう子のことを持ち出し、かつての威勢のいい勇樹に戻そうとした。

勇樹は、退学と病気を隠していることが、負担になってきていた。今ここでは、嘘を突き通しても、いずれ、ばれることだと思った。退院し、健康な身体になっても、もはや、野球はできない。いつか旧友と出会ったとき、野球ができなくなったことを言わなければならない。そのときのことを思うと、今以上の苦しみを味わうような気がした。いずれ、ばれる嘘をずっと心に抱えているより、いっそ、今ここで、八神に本当のことを言ったほうが、気が楽になるような気がした。

勇樹は、しばらく何も言えなくなった。八神はますます不安になってきた。八神は、さっと立ち上がり、列を作っているカウンターに走って行った。しばらくすると、ジンジャーエールとオレンジジュースを両手に持って駆けてきた。ジンジャーエールを勇樹に手渡し、笑顔で腰を下ろした。八神は、ジュースを一口のみ、上目使いで話し始めた。「あ、ゆう子、このごろ、連絡無いな～、もしかして、彼氏ができてたりして。ゆう子、可愛いし、まさか、ストーカーに、つけねられてたりして」真剣な顔で聞いていた勇樹は、ゆう子の顔を思い出していた。「ストーカー、東京には、多いんやろか？」真に受けた勇樹は、本気で心配した。

八神は、ハハハ、と笑い声を上げ、両手でポンと叩いた。「冗談よ。勇樹、今でも、ゆう子のこと好きなんだ。顔に書いてあるぞ」勇樹の顔は真っ赤になっていた。「バカ言え。ちょっと、心配しただけだ。八神が、ストーカーとか言い出すからだ」ムキになった勇樹を見て八神は、ほっとした。勇樹は、今、ゆう子がそばにいてくれたら、どんなに気が安らぐことだろうと思った。反面、無様な自分を優子に知られたくないという気持もあったが、隠し続けた後にゆう子に知られることのほうが、もっと惨めになるような気もした。

勇樹は、退学したこと、骨肉腫になったことを隠していることが、馬鹿げているような気がしてきた。そのことを隠していたからって、どうなるわけでもないし、何の得もしないじゃないかと思った。事実を話したほうが、気持がすっきりして、気持ちよく入院できるような気がした。八神に事実を話せば、きっとゆう子にも伝わると思った勇樹は、潔く事実を話すことにした。

窓の外を見ていた勇樹は、八神の顔を見つめ、本当のことを話し始めた。「八神、ごめん、さっきの話、嘘なんだ。俺は、もう、学校を退学した。それと、俺は、もう、野球ができない肩になった。あす、俺は、入院する。骨肉腫なんだ。嘘を言って、ごめん」勇樹は、コックンと頭を下げた。

八神の顔は、凍りついてしまった。まったく信じられない突然の話になんと言っていいか、口が動かなくなった。「え、マジ！骨肉腫、ガンってこと。入院するの？」八神は、耳を疑うような事実を再確認した。勇樹は、小さく頷いた。八神の顔は、真っ青になっていた。「悪い、大げさだな。たいしたことはないんだ。骨肉腫といっても、最も初期のもので、まったく命には別状無いんだ。手術の結果次第では、また、野球ができると医者は言っていた。俺は、気楽なもんさ」あまりにも深刻な顔をした八神を見て、適当にごまかした。

啞然となった八神を置いて自宅に帰った勇樹は、小学校時代から使っていた勉強机で、糸島ホークスのエースとして活躍していた無邪気なころを思い出していた。そのころは、野球天才とおだてられ、天狗になって、無我夢中で練習していた。練習では、ゆう子がそばにいて励ましてくれた。グラウンドでランニングしているとき、発破を掛けてくれたのは、ゆう子だった。「何、やってんだ。このくらいでへたばって、そんなこっちゃ、プロにはなれんぞ。走れ、走れ」ゆう子の声が頭の中を響き渡った。勇樹の目から、突然、涙がこぼれ落ちた。

プロになれると思い込んで練習していた子供のころには、もう、戻れない。子供のころから抱いていたプロ野球選手の夢は、一瞬にして壊れて、もう二度とその夢を追いかけることはできない。甲子園のエースとしてマウンドに立ち、ゆう子にいいところを見せることもできなくなった。勇樹は、この事実を認めたくなかったが、肩の痛みは、非情な現実を突きつけた。

プロ野球の夢は消えうせ、僕の前道は閉ざされた。ついに、一人ぼっちになってしまった。勇樹は、心の奥底でつぶやいた。本棚からアルバムを取り出し、最初のページを開いた。そこには、糸島ホークスがリトルリーグ県大会で優勝した時の記念写真があった。応援にやって来た小学校4年生の小さなゆう子が、勇樹の横で笑っていた。勇樹は、じっと、ゆう子の笑顔を見つめ続けた。そして、涙でゆう子の笑顔が消えたとき、涙を手でぬぐい、パチンとアルバムを閉じた。

## 大切な人

勇樹の退学と骨肉腫のことを知った八神は、すぐにゆう子に知らせるべきか悩んだ。勇樹が、この事実を告知したということは、ゆう子に知らせて欲しいと言っている様なものと八神は感じ取っていたが、とりあえず、仲間の横山に知らせることにした。翌日、午後3時過ぎに、八神は横山に電話した。「横山、おひさ、いま、電話できる？」八神は、話が長引くと思ひ、話を始める前に確認した。

横山は、二人部屋で寮生活をしていて、ちょうどそのとき相棒の宮沢は、外出しており、一人で英語の勉強をしていた。「いま、一人で勉強していたところ。誰もいないから、かまわないよ。いったい、かしくまってどんな話？」横山は、てっきり、彼氏の話でも聞かされるのではないかと思っていた。八神は、大きく深呼吸して、話し始めた。「昨日のことなんだけど、マックで、ぼったり、勇樹に出くわしたのよ。そいで、勇樹から、信じられない話を聞いたわけ」八神は、興奮して、息がつまりそうだった。

横山は、勇樹と聞いて、少し奇妙に感じた。「勇樹が、糸島にいるのは、奇妙ね。それで？」横山は、話を促した。八神は、もう一度、大きく深呼吸した。「聞いて、腰を抜かさないでよ。勇樹、退学したらしいの。それも、骨肉腫になってしまったからなのよ。明日、検査入院すると言ってた」横山は、耳を疑ったが、はっきりと、退学と骨肉腫と聞こえた。「確かなの。勇樹が骨肉腫って」横山は、もう一度、聞きなおした。

八神は、頷き、返事した。「確かよ。勇樹が、言ったんだもの。間違いないよ」横山は、しばらく黙っていた。骨肉腫は、早期発見された場合、手術で命は助かると知っていたが、肺に転移した場合、死亡することがあると父親から聞いていた。「でも、検査してみなければ、骨肉腫かどうかははっきりしないわけじゃない。取り越し苦労時じゃない」横山は、八神の早合点を指摘した。



興奮している八神は、口をとんがらせて話した。「でも、勇樹、本人が骨肉腫って言ったんだから。間違いないわよ」八神は、つじつまが合わないと思ったが、骨肉腫といったことが頭にこびりついていた。横山は、検査入院ではなく、化学治療のための入院ではないかと思った。「八神、本人が骨肉腫だと言ったんだったら、間違いないわね。きっと、検査入院ではなくて、化学治療のための入院だと思う。命には別状ないと思うけど、心配よね」横山の顔が、青くなった。

八神は、机の上においていたペットボトルのコーラを一口のみ、肝心の話 시작했다。「ちょっと相談なんだけど、このことをゆう子に話すべきかしら」横山は、返事につまった。しばらく考えて、返事した。「そうね、ゆう子には、知らせるべきだともう。二人だけの秘密にするわけにはいかないと思う。ゆう子には、私から、話してもいいわよ」ゆう子にこのことを話し、ゆう子に勇樹を励まして欲しかった。

八神は、ほっとした。ゆう子にこのことをどのように話していいか悩んでいた。「そう、話してくれる。頼むわ。こういうことって、苦手だから。頼むわよ」八神は、ゆう子が、錯乱しないことを神に祈った。「私に任して。ゆう子は動揺すると思うけど、やっば、知らせてあげるのが、親友の務めじゃない」横山は、ゆう子がショックを受けると思ったが、思い切って話をすることにした。

翌日午後2時に、横山はゆう子に電話した。「今、時間取れる。ちょっと長話になると思うから」ゆう子は、まったく問題が解けずぼんやりしていたところ、横山のはりのある声を聞き、ハッとわれに返った。「何、いいわよ」ゆう子は、朝練を終え、寮の自習室で数A漸化式の宿題をやっていた。自習室にはゆう子一人だった。「ゆう子、かなり、ショッキングな話があるの。勇樹のことなんだけどね」横山は、前置きをして、ゆう子に心の準備をさせた。

ゆう子は、勇樹と聞いて、忘れていた記憶が呼び戻された。「え、勇樹に何かあったの？」横山は、心を鬼にして、単刀直入に八神から聞いたことを話し始めた。「昨日、八神から聞いたんだけど、勇樹、退学して、骨肉腫の治療のために、Q大病院に入院したらしいの。これは、八神が、勇樹、本人から聞いたみたいだから、間違いないと思う。ゆう子には、知らせておかないと、と思って」横山は、冷静に話した。

ゆう子はしばらく何も言えなかった。「骨肉腫、勇樹が、ガンってこと？」ゆう子は、骨肉腫のことは、よく知らなかった。「そう、骨のガンになったみたい。命には別状ないと思うけど、野球はできなくなるかもね」横山は、できるだけ冷静に話し続けた。ゆう子は、言葉につまってしまった。7月から付き合っている和哉の顔が頭に浮かんだからだ。

「ゆう子、ガンといっても、初期のものであれば、完治するのよ。リハビリによっては、また、野球、できるかも知れないから、心配ないよ」横山は、落ち込んだゆう子の気持ちを少しでも和らげようと、適当な慰めを言った。「たいしたこと、ないのね。また、野球ができるといいけど。勇樹って、ついてないのね」ゆう子は、心配をしてみても、自分にはどうすることもできないと、突き放すような言い方をした。

「私と八神は、今月中に、お見舞いに行くわ。ゆう子は、東京だし、すぐには、戻ってこられないから、無理しないでいいよ。勇樹は、私たちが慰めておくから」横山は、ゆう子に心配かけないように話を持っていった。「頼むわ。毎日練習で、休みはないから。おそらく、糸島に帰れるのは正月ぐらいなものね」ゆう子は、勇樹のことをこれ以上考えたくなかった。「分かった、勇樹のことは任せて。心配するほどのことじゃないと思う。きっと、すぐに退院するんじゃないかしら。お見舞に行ったら、また、勇樹の様子、電話するわね。そいじゃ」横山は、あっさりと電話を切った。

スマホをぼんやり眺めていると、勇樹という言葉が頭の中でシンバルを鳴らしたときのように響き渡り、胸の中に小さな冷たいつむじ風がピュッと巻き上がったかと思うと、それは一気に大きなトルネードとなり、子供のころのゆう子にタイムスリップさせた。ゆう子のスクリーンには、曾根グラウンドでランニングしている勇樹に、小さな赤いメガホン片手に大声で発破をかける無邪気な自分が映し出されていた。

「ゆう子、あのころ、何に向かって駆けていたんだ？今は、何に向かって駆けているんだ？オリンピックを目指しているのか？」突然、スクリーンの陰から誰かが問いかけてきた。ゆう子は、両手で顔を覆い、じっと涙をこらえた。ゆう子には、本当の自分の気持が見えなかったからだ。東京に出てきたのは、勇樹が大分の名門Y高校に進学したからに過ぎなかった。夢に向かって頑張る勇樹に負けまいと、ゆう子は新体操の名門W高校に進学したに過ぎなかった。

勇樹が糸島に戻った今、ゆう子は、東京にいる自分がばかばかしくなってきた。東京でいったい何を求めるのだろうか？オリンピックに出るため？自問自答すればするほど、自分がおろかに思えてきた。一ヶ月悩んだ結果、ゆう子は、糸島に帰る決意をした。糸島高校に転入する方法はないかと秘かに考えた挙句、一か八か、篠田教頭をお願いする以外方法はないように思えた。ぶしつけと思ったが、さっそく、教頭に電話でお願いしてみることにした。

糸島中学に電話すると、懐かしい事務の梅木さんが出た。教頭につないでもらうと、かつての威厳のある少し甲高い声が耳に飛び込んできた。「ゆう子、どうしたの？今頃」ゆう子は、どぎまぎしながら、とにかく用件を単刀直入に話すことにした。「先生、お願いがあります。怒らないでください。電話でお願いするようなことではないと分かっていますが、先生しか相談できる人がいないんです。聞いてくれますか？」ゆう子は、胸がはちきれそうになっていた。

教頭は、金縁のめがねを右手の中指で少し持ち上げ、ほんの少し間を取り、トーンを落としゆう子に訊ねた。「どうしたの。そんなに、困惑して。用件をはっきり言いなさい」ゆう子は、胸を押さえて、落ち着いてゆっくりと話し始めた。「先生、糸島高校に転校したいんです。できますか？」ゆう子は、きっぱりと訊ねた。「え、転校したい？どういうこと？理由を言いなさい」教頭は、ぶしつけなお願いに、イラっときた。

「理由は、それは、オリンピックを目指すような自分ではないことに気づいたからです」ゆう子は、こんな理由では、ダメかと思ったが、他に思いつかなかった。「なに、言っているの。馬鹿なことを言うんじゃない。オリンピック目指して、とことんやりなさい。監督を信じて、頑張りなさい。いいわね」教頭は、強い口調で説得した。ゆう子は、一方的な説得に、何も反論できなくなってしまった。

やはりこんな理由ではダメだったかと落ち込み、すんなり引き下がってしまった。もう一度、作戦を練り直すことにした。ゆう子は、自分の頭ではどうにもならないと思い、横山に相談することにした。教頭の説得でへこんでしまったゆう子は、日曜日の午後、横山に電話した。そのころ、横山もゆう子に勇樹のことで電話しようと思っていた。

自習室の片隅で誰もいなくなったのを確認し、横山に電話をかけた。「ちょっと、時間取れる？お願いがあるんだ」横山も電話しようと思っていたところで、ちょうどいいタイミングでかかってきたと思い、即座にOKを出した。「いいよ、どんなこと？」ゆう子は、手短かに要点を話すことにした。「突然のことで、びっくりすると思うけど、実は、転校したいのよ。糸島高校に。相談なんだけど、どうすれば転校できる？」横山は、あまりにも予想外の相談に返事ができなかった。

「ちょっと待ってよ。転校って、どういうことよ。いったい、なにがあったのよ。監督とけんかでもしたの？」ゆう子は、頼みは横山と思い、じっくりと話すことにした。「それが、なんと言うか、よく考えたんだけど、自分って、オリンピックを目指すほどの才能はないと思うの。だから、糸島高校で受験勉強に励んで、小学校の先生になろうかと思っているのよ。どう思う？」何日も悩んだ末、やっと思いついた理由だった。

横山は、頷き、ゆう子の本当の理由がぴんと来た。「転校するのはいいけど、転入試験があるんじゃない。高校に問い合わせしてみたの？」ゆう子は、転入試験があることを考えても見なかった。「え、試験があるの？困ったな～」ゆう子は、部活ばかりやっていたため、学力には自信がなかった。「とにかく、転入できるか、高校に問い合わせてみなさいよ。きっと試験はあるはずよ。公立高校への転入は難しいと聞いているけど」ゆう子は、試験と聞いて、後の言葉が出なくなった。

「話は替わるけど、ゆう子、ちょっと、やばい話があるのよ。勇樹のことで。11月に入って、八神とお見舞いにいったんだけど、そのとき、勇樹から深刻な話を聞いたのよ。なんと言うか、ガンが肺に転移していたんだって。だから、退院のめどが立たないんだって。勇樹って、とことんついてないよな。ゆう子、聞いている？」ゆう子は、頭が真っ白になっていた。「あ、聞いている。転移したって。顔色はどうだった？」ゆう子は、やせ細った勇樹の姿を思い浮かべてしまった。

冷たい不吉な予感が、ゆう子を襲っていた。一刻も早く糸島に帰らなければ、永遠に勇樹とは会えなくなるような気持になった。「横山、いろいろと気を使ってもらって、ありがとう。勇樹のこと、お願い、そいじゃ」ゆう子は、話を続ける気力を失っていた。もう一度、教頭に転入のお願いをする前に、両親に転入の許しをもらわなければと、さっそく電話することにした。

電話に出たのは、母親、陽子であった。「ママ、大切な話があるの。いま、いい」陽子は、突然の電話に胸騒ぎがした。「どうしたの？何か困ったことでもあったの？」ゆう子は、躊躇せずに自分の決意をぶつけることにした。「ママ、転校してもいい？糸島高校に。うん、と言って、ママ。お願い」陽子は、あまりにも、唐突で、短絡的な話にあっけにとられてしまった。「いったい、どういうことよ。ちゃんと、ママが分かるようにおっしゃい。なにがなんだか、さっぱり分からないじゃないの」

ゆう子は、うん、と言ってもらうまで、粘り強く話すことにした。「実は、将来の夢が変わったの。オリンピック選手じゃなくて、子供たちに体操を教えたいの。だから、糸高でしっかり勉強して、小学校の先生になろうと思うの。いいでしょ、ママ」陽子は、なんと言って返事していか迷ってしまった。「ちょっと待って、パパと代わるから。落ち着いて、ちゃんと話すのよ」陽子は、宗一郎に受話器を手渡した。

「元気か？どうしたんだ。部活がいやにでもなったのか？」宗一郎は、ゆう子のおかしいことに、陽子の話から察していた。「パパ、さっき、ママにもお願いしたんだけど、糸高に転校したいの。将来は、小学校の先生になりたいの、いいでしょ」宗一郎は、糸島に帰ってくることを喜んだが、もう一度決意を確認したかった。「W高校がいやになったんじゃないくて、先生になるために転校したいんだな。そうだな」ゆう子は、宗一郎の質問に笑顔がこぼれた。

「はい、パパ、糸高でしっかり受験勉強して、必ず、教育大に合格してみせる。パパは賛成してくれるのね」ゆう子は、宗一郎が承諾してくれたと思い、飛びあがって喜んだ。宗一郎の本音は、ゆう子の東京行きに反対だった。ゆう子の夢をかなえるため、東京行きをしぶしぶ承諾した。だから、できれば、オリンピックの夢をあきらめて、糸島に戻ってきて欲しいと、毎日、願っていた。戻ってきたいと聞いたとき、うれしくてたまらなかった。



「ゆう子の好きにすればいい。ママに代わるよ」宗一郎は、陽子に受話器を手渡した。「ゆう子、マジで言ってるのね。先生になるために、転校するのね。間違いないわね。それだったら、ママは、反対しないわ。でも、簡単に、転校できるのかしら？監督に相談したの？」陽子は、転入試験もあり、公立高校への転校は難しいことを知っていた。「ママ、ありがとう。転校のことは、これから、学校に話すことにする。ありがとう」ゆう子は、そっと、電話を切ると、月曜日のことを考えた。その日は、生理痛を理由に部活を休み、もう一度、教頭をお願いすることにした。

月曜日、4時過ぎに寮に戻ると、さっそく糸島中学に電話を入れた。受話器を取ったのは、初めて聞く若い声の事務員だった。丁寧な受け答えの後、事務員は、教頭につないだ。最終決断をしていたゆう子は、教頭の逆鱗に触れたとしても、引き下がるつもりはなかった。「先生、こんにちは。転校のことでお電話しました。話を聞いてください」教頭は、あきれていたが、ゆう子の気持も考えてあげなければならないように思えた。

「練習についていけないの？それとも、監督とうまくやっていけないの？監督は、ゆう子のことを高く評価していたのよ。何か、他に悩みでもあるの？」教頭は、転校したい本当の理由を知りたかった。「監督は、優しく、立派な方です。練習も、個人の実力を考えて、調整してくれます。部活には、何の不満もありません。転校したい理由は、小学校の先生になりたいからです。糸島高校でしっかり勉強して、教育大に進学したいと思っています。ですから、許してください」ゆう子は、必死にお願いした。

教頭は、ゆう子の決意はマジだと感じた。もし、転校に反対したなら、退学すると言い出すのではないかと不安になった。「マジなのね。転校は。ご両親も賛成なのね」ゆう子は、一歩前進したと嬉しくなった。「はい、両親は、賛成してくれました。転校しても、体操も、勉強も、頑張ります。先生、転校を許してください」教頭は、ゆう子の熱意に負けた。「分かりました。でも、転入には、試験があるのよ。それで、落ちたら、どうするつもり」教頭は、気持だけでは転校できないことを、突きつけた。

ゆう子は、目を吊り上げ、強い口調で返事した。「はい、そのときは、退学します。そして、八神と同じ定時制に行きたいと思っています」ゆう子の大胆な返事に、教頭は腰を抜かした。「ちょ、ちょっと、待ちなさい。退学は許しません。ダメです、退学は。とにかく、転入の手配をしますから、じっと待ってなさい。いいですね。こちらから連絡するまで、このことは誰にも話してはなりませんよ。いいですね」教頭は、自分の経歴に傷がつくと思い、退学だけは避けねばと、ムキになって説き伏せた。

ゆう子は、ほっとして、明るく返事した。「はい、試験は、必ず合格して見せます。よろしくお願いします」教頭は、ゆう子の実力で合格できるか不安であったが、転校の手配をすることにした。「試験は、12月です。それまで、国、英、数、を必死で勉強しなさい」教頭は、電話を切ると、頭をかきむしった。教頭は、まず、親友のマリナ監督に転校の事情を話し、承諾してもらった。

転入試験は、ゆう子が思っているほど難しくなかった。数学は、あまりできなかったが、得意の英語は満点に近いと思った。試験結果は、合格であった。ゆう子は、3学期から糸島高校に転校することが決まった。転校の結果は、両親だけでなく、横山、八神にも知らせた。教頭は、合格を知ったとき、全身の力が抜けるほど、ほっとした。教頭が思っていた以上に、ゆう子はしっかり勉強をしていた。

## ひとりじゃない

帰郷の準備をすでに終えたゆう子は、冬休みが待ちどろしかった。12月25日、午前11時15分の福岡行きの航空券をさっそく購入したゆう子は、一刻も早く、糸島に帰り、勇樹のそばでガンの快復を祈りたかった。唯一つ、気にかかることがあった。それは、いま付き合っている和哉との別れであった。和哉の気持ちを傷つけると思ったが、もう、二度と会えない、ときっぱりと伝える決意をした。

和哉との出会いは、渋谷でのナンパだった。和哉は、都立高校2年生で、日曜日には仲間5人とストリートダンスをやっていた。彼らは、ダンススクールに通っていて、将来はバックダンサーになる夢を持っていた。ゆう子は、和哉のダンスを見て、好きになってしまった。また、和哉の半端ないダンスへの情熱にますます心が惹かれていった。そのときは、勇樹のことなど、頭の片隅にもなかった。

今でも、和哉のことが好きだった。だが、勇樹への思いは、単なる恋愛感情とは違っていた。ゆう子自身も、はっきりと言葉では説明できない、根本的に違う何かがあった。和哉のことを、正直、恋人として好きだった。でも、どんなに好きでも、別れなければならない宿命にある、となぜか思えた。勇樹への思いは、いかなる恋愛も太刀打ちできない、不思議な魔力を持っていたからだ。

本来ならば、楽しいクリスマスイブになるはずだったが、宿命的な別れの日となった。ゆう子は、約束のいつものマックに向かった。和哉は、いつもの窓際の席で外を眺めていた。ゆう子は、オレンジジュースを載せたトレイをテーブルに置くと、和哉の前にそっと座った。「遅くなって、ごめんなさい」和哉は、気にせず、微笑んで返事した。「俺も、今着いたところさ」ゆう子は、固まった顔で、ほんの少し微笑んだ。

和哉は、いつもと違うゆう子の様子を気遣った。「元気がないじゃないか。風邪でもひいたのか？」ゆう子は顔を振り、ストローに口をつけた。ゆう子は、最初の言葉に戸惑ったが、思い切って転校の話を切り出した。「突然なんだけど、転校することになったの。黙っていて、ごめんなさい」ゆう子は、コックンと頭を下げた。和哉は、一瞬息がつまったが、何か、家庭の事情があったのではないかと気遣った。

「謝らなくてもいいよ。人生には、思いがけないことがあるものさ。糸島に帰るんだね」和哉は、田舎の糸島のことを聞かされていた。「この前までは、オリンピックに出るのが夢って、馬鹿なことを言っていたけど、自分の実力が分かったの。でも、体操を捨てたんじゃなくて、子供たちに、体操を教えたいと思うの。小学校の先生になって、子供たちに、体操の楽しさを教えたいの。あまりうまく言えないけど」精一杯の嘘をついた。

和哉は、素直に頷いた。「すばらしいじゃないか。子供たちに教えることも、オリンピックに出場することと同じくらいすばらしいことだ。ゆう子は、さすがだな」和哉は、ゆう子が大人に見えた。「俺なんか、実力もないのに、夢だけは、バカデカイからな。笑っちゃうよ」ゆう子の何か沈んだ口調が気にかかり、笑いを取ろうとしたが、蠟人形のような冷たい目がじっと和哉を見つめていた。

「いつ、糸島に帰るんだ。もう、会えなくなるな」和哉は、言葉につまってしまった。離れても、メールのやり取りをしたかったが、ゆう子の冷たい表情を見ていると言い出せなかった。ゆう子は、本当の理由を隠していることを思うと、罪悪感に陥った。一刻も早く、この場を立ち去りたかったが、和哉への思いを伝えておきたかった。「東京に出てきて、本当によかったと思う。本当の自分に気づいたし、和哉と出会えたから。東京の思い出は、決して忘れないと思う」ゆう子は、少しはにかんで、和哉への好意を伝えた。

「僕もだよ、ゆう子に出会って、毎日が楽しくてさ、ずっと、ゆう子と付き合いたいと思ってたよ。目標を持って頑張っているゆう子を見て、俺も、少しは、まともになったよ。現実逃避のダンスだったけど、今は、自分なりに、真剣に取り組むようになったからな。ゆう子がいなくなると、寂しいけど、しょうがないよな」和哉は、ゆう子の存在の大きさを感じ始めていた。和哉の声を聞けば聞くほど、ゆう子の気持は、ますます落ち込んでいった。

ゆう子の冷たい表情を見ていると、転校には他人には言えない重大な事情があるのではないかと直感した。「人生って、こんなものだよな。俺は、能天気だし、へこんでも、すぐに起き上がるタイプだし、ゆう子、元気でな」和哉は、これ以上いるとゆう子を苦しめることになるのではないかと、用事を装って立ち去ることにした。「悪い、俺、ダチと約束があるんだ。お先、そいじゃ」和哉は、最後の笑顔を残し、立ち去った。

ゆう子は、一言も、返す言葉が出てこなかった。寮に戻り、明日の出立の準備をして、眠りについた。高校生になって一度も勇樹の夢を見たことがなかったが、その夜の夢に、勇樹が現れた。なぜか、勇樹は手を振っていた。そして、次第に小さくなり、消えてしまった。そのとき、はっと目が覚め、不吉な胸騒ぎがした。早めに寮母さんと寮生に挨拶をして、国立駅に向かった。「勇樹、頑張るのよ。負けちゃダメ。もうちょっとで、会えるからね。頑張るのよ。頑張るのよ」ゆう子は、悪夢を打ち消すように、心の中で何度もつぶやいた。

羽田空港に着くと、お土産を買い、手続きカウンターの列に並んだ。ゆう子は、早く勇樹に会いたくて、いてもたってもいられなかった。足踏みをはじめたとき、スマホの着メロ“たしかなこと”が鳴った。そっと、スマホを左耳にあてると、横山の静かな声が流れ込んできた。一瞬、ゆう子の目は点になった。そして、スマホが、するりと左手から落ち、ゆう子は倒れた。

## ひとりじゃない

<http://p.booklog.jp/book/80927>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80927>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80927>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ